

台風の古い日本名*

肥 沼 寛 一**

いまでは、台風という言葉を知らない人はあるまいと思うが、この言葉は昭和21年に当用漢字がきまってからのことで、それまでは「颱風」とかいた。漢和字典によると「颱」とは南支那海に起る暴風だそうである。

「颱風」というのは故岡田武松博士の命名で、明治43年(1910)頃に出版された「近世気象学」の中で始めて用いたものらしいから、比較的新しい名前である。だから日本で始めて暴風警報が行われるようになった明治16年頃は、まだ、「颱風」という名はなく、その後も、なおしばらくは、暴風雨という一般的名称で扱われていたらしい。

しかし、日本に台風の襲来する夏から秋にかけては、一般的には風の最も弱い季節であるのに、台風が襲来すると、どの季節よりも強い風が吹く。だから、台風には古くから何か特別の名称があったかも知れない。これに関して、滝沢馬琴の弓張月に次のような文がある。

「それ大風烈しきを颯はやてという。また、甚だしきを颱あかしまと称ふ。颯は常に驟に起り、颱は漸くありて来る。颯は瞬のうちに発りて倏に止み、颱は一昼夜或は数日にしてなお止まず。正二三四月は颯多く、五六七八月は颱多し。」

この内容から判断すれば、「はやて」は明らかに、冬から秋にかけての前線性の暴風だし、「あかしま」は台風を意味している。そうすると、馬琴の生きていた江戸時代の前期には、台風のことを「あかしま」と呼んでいたようにも見える。しかし、弓張月以外にも、この言葉を用いた例があるのかどうか、筆者には解らない。が、用いられた例があるとしても、非常に稀なものではないか。だから、「あかしま」という言葉が、江戸時代に一般的に用いられていたかについては疑問がある。

大言海によると、「あかしま」は「あからしまかぜ」の略であつて、これは忽倏風(あからさまかぜ)の転じたものであり、「あからさま」とは「突然に」という意味だそうである。また、日本書紀には暴風と書いて「あ

からさまかぜ」と読ませたところがいくつかあるらしい。たとえば、神武記に

「海中卒遇二暴あからさまかぜ風一、皇舟漂蕩」

あるいは、景行記四十年十月に

「至レ干ニ海中一暴あからさまかぜ風忽起、王船漂蕩」

などの記事がある。そうしてみると、「あからさまかぜ」という言葉は、少くも奈良朝、あるいは、それ以前から用いられていたものであろう。

一方、馬琴のいう「はやて」は疾風とかき「はやち」と読んで、かなり古くから、突風のようなものを意味した言葉だったらしい。「ち」はいうまでもなく風の古語であった。

田口竜男氏の編集した日本気象資料には、古くからの沢山の暴風雨の記事が集録されているが、その発生月から見ると、ほとんどが台風のようなところ。ところが、古いものの殆んどは、大風という普通名詞が用いられている。たとえば、最も古い暴風に関するものは、雄略天皇十七年八月に、熊野に襲来した台風と思われるもので、熊野年代記に

「八月熊野大風、諸木悉倒」

とある。なお、少数ではあるが、暴風という言葉を用いた記事もあるが、これも、多分、普通名詞として用いたものらしい。

そうして見ると、「あからさまかぜ」という言葉は、日本書紀に用いられているが、その後も広く用いられたのか、どうかは疑問である。まして、それが台風のような特種な暴風を意味するものだったか、あるいは、単に激しい風を意味したかについては、全く解らない。したがって、「あかしま」を台風とし、「はやて」を冬の暴風と考えたのは、ことによると、馬琴の発案だったかも知れない。

それなら、台風のような特種な暴風を意味する言葉は、日本にはなかったのかということ、そうでもない。夏から秋にかけての暴風に「野分」という言葉がある。これは明らかに台風のこと、言葉の意味から見れば、野の草を吹き分けるということかも知れない。しかし、実際には、台風の中心の通過した処は樹木が吹き倒されて

* Japanese Names of Typhoons in Old Times

** Kan'ich Koenuma, 気象庁予報部—1960年7月1日受理—

いることから出た言葉なのであろう。そうはいうものの、或る特種な現象を頭にえがいて『野分』という名がついたのかも知れないが、それは解らない。

『野分』という言葉は源氏物語や枕の草紙にもでてくるから、平安朝の頃には既に用いられていたことは明らかである。その後になつても、徒然草にもでてくるし、更に俳句の季題にもなつてゐるから、この言葉は古くから引つづいて、広く、用いられていたわけである。それなら、台風という現象が明らかになったという時に、それを野分と呼ぶことにしてもよかつた筈である。

台風のことが解つて来た時に、それを何と命名するかということが問題になつたのかどうかは知らない。最初に『颱風』と命名された岡田先生は、漢学の素養が深く、江戸趣味の豊かな人だったから、野分という言葉も考慮されたかも知れない。しかし、俳句の季題などの言葉は余りに文学的で、技術や学術用語としての適性にも問題はあろう。これと同じことは、『さみだれ』という言葉がすたれて、梅雨という言葉に統一されたことにも見られるようである。

学 界 消 息

1. 台風第3号

台風第3号(Mary)は、6月2日ルソン島の西方海上で発生、海上を迷走した後、8日夜半頃Cantonに上陸10日頃台湾の北を通過して東支那海に出、屋久島の南を11日06時、父島付近を13日00時に通過、北東に去った。大陸上陸前最低気圧は980mbに達し、CantonからFukienにおよぶ沿岸諸都市、台湾に多大の被害を与え、南九州には豪雨、洪水をもたらした。

2. 台風第14号

台風第4号(Nadine)は6月1日フィリピン東方海上に発生、6月9日12時頃鳥島を通過して北北東に向つて去った。

3. 6月21—22日の豪雨と強風

6月21日夜から22日の朝にかけて、九州、四国、関西、関東にわたり、豪雨があり、各地に被害を出した。前線は大分と熊本南部を通過していたため、大分の雨量は175ミリに達し、その他九州各地で100ミリ以上、洪水のため2,000戸以上が浸水した。

またこれに伴う強風のため、静岡県沖では、かつを船(33トン)が20メートル/秒の風で沈没、また横浜港、川崎港では強風雨のため22日14時まで船の出入が止まった。

4. 台風第5号

台風第5号(Olive)は、6月21日カロリン諸島で発生、西北西に進み、26日12時頃マニラ付近を通過、29日18時頃海南島の北を通過して、大陸に上陸した。フィリピン上陸前最低気圧は950mbに達し、フィリピンでは100名以上ホンコンでは40名以上の死者を出した。

数値予報国際シンポジウム便り(4)

1) 前回便りのシンポジウム講演内容に若干の変更があったので次回に決定版を掲載する予定です。

2) 出席申込みは8月31日までですから、なるべく早日に御申し込み下さい(申込用紙は前号にあり)。